

鹿踊りのはじまり

宮沢賢治

青空文庫

そのとき西のぎらぎらのちぢれた雲のあいだから、夕陽ゆうひは赤くななめに苔こけの野原に注ぎ、すすきはみんな白い火のようにゆれて光りました。わたくしが疲つかれてそこに睡ねむりますと、ざあざあ吹ふいていた風が、だんだん人のことばにきこえ、やがてそれは、いま北きた上かみの山の方や、野原に行われていた鹿踊りの、ほんとうの精神を語りました。

そこらがまだまるつきり、丈たけたか高い草や黒い林のままだったとき、嘉かじゅう十はおじいさんたちと北上川の東から移ってきて、小さな畑を開いて、粟あわや稗ひえをつくっていました。

あるとき嘉十は、栗くりの木から落ちて、少し左ひざの膝を悪くしまし

た。そんなときみんなはいつでも、西の山の中の湯の湧くところへ行つて、小屋をかけて泊つて療すのでした。

天気の良い日に、嘉十も出かけて行きました。糧と味噌と鍋とをしょつて、もう銀いろの穂を出したすすきの野原をすこしびつこをひきながら、ゆつくりゆつくり歩いて行つたのです。

いくつもの小流れや石原を越えて、山脈のかたちも大きくはつきりなり、山の木も一本一本、すぎごけのように見わけられるところまで来たときは、太陽はもうよほど西に外れて、十本ばかりの青いはんのきの木立の上に、少し青ざめてきらきら光つてかかりました。

嘉十は芝草の上に、せなかの荷物をどっかりおろして、栃と

粟とのだんごを出して喰^たべはじめました。すすきは幾^{いく}むらも幾^{いく}むらも、はては野原いっぱいのように、まっ白に光つて波をたてました。嘉十はだんごをたべながら、すすきの中から黒くまつすぐに立っている、はんのきの幹をじつにりっぱだとおもいました。

ところがあんまり一生けん命あるいたあととは、どうもなんだかお腹^{なか}がいっぱいのような気がするのです。そこで嘉十も、おしまいに栃の団子をとちの実のくらい残しました。

「こいづば鹿^{しか}さ呉^けでやべか。それ、鹿、来て喰^け」と嘉十はひとりごとのように言つて、それをうめばちそうの白い花の下に置きましました。それから荷物をまたしよつて、ゆっくりゆっくり歩きだしました。

ところが少し行つたとき、嘉十はさつきやすんだところに、
手拭てぬぐいを忘れて来たのに気がつきましたので、急いでまた引つ返
しました。あのはんのきの黒い木立がじき近くに見えていて、そ
こまで戻るもどくらい、なんの事でもないようでした。

けれども嘉十はびたりとたちどまつてしまいました。

それはたしかに鹿のけはいがしたのです。

鹿が少くても五六疋びき、湿しめっぽいはなづらをずうつと延ばして、
しずかに歩いていゝらしいのでした。

嘉十はすすきに触ふれないように気を付けながら、爪つまだ立てをして、
そつと苔を踏ふんでそつちの方へ行きました。

たしかに鹿はさつきの柘つの団子にやってきたのでした。

「はあ、鹿等しかたあ、すぐに来たもな。」と嘉十は咽喉のどの中で、笑いながらつぶやきました。そしてからだをかがめて、そろりそろりと、そつちに近よって行きました。

一むらのすすきの陰かげから、嘉十はちよつと顔をだして、びつくりしてまたひつ込こめました。六疋ばかりの鹿が、さっきの芝原を、ぐるぐるぐるぐる環わになつて廻まわつていたのでした。嘉十はすすきの隙間すきまから、息をこらしてのぞきました。

太陽が、ちようど一本のはんのきの頂いただきにかかつていましたので、その梢こずえはあやしく青くひかり、まるで鹿の群を見おろしてじつと立っている青いききものようにおもわれました。すすきの穂も、一本ずつ銀いろにかがやき、鹿の毛並けなみがことにその日はりっぱで

した。

嘉十はよろこんで、そつと片膝をついてそれに見とれました。

鹿は大きな環をつくつて、ぐるくるぐるくる廻つていましたが、よく見るとどの鹿も環のまんなかの方に気がとられているようでした。その証しやうこ拠には、頭も耳も眼めもみんなそつちへ向いて、おまけにたびたび、いかにも引っぱられるように、よろよろと二足三足、環からはなれてそつちへ寄つて行きそうにするのでした。

もちろん、その環のまんなかには、さっきの嘉十の柝の団子がひとかけ置いてあつたのでしたが、鹿どものしきりに気にかけているのは決して団子ではなくて、そのとなりの草の上にくの字になつて落ちてゐる、嘉十の白い手拭らしいのでした。嘉十は痛い

がきこえてきたからです。

「じゃ、おれ行つて見で来こべが。」

「うんにや、危ないじゃ。もう少し見でべ。」

こんなことばもきこえました。

「何時いつだかの狐きつねみだいに口くち発破はつぱなどさか罹かつてあ、つまらないもな、高で栃の団子などでよ。」

「そだそだ、全ぐだ。」

こんなことばも聞きました。

「生きものだがも知れないじゃい。」

「うん。生きものらしどごもあるな。」

こんなことばも聞きました。そのうちにとうとう一疋が、いか

にも決心したらしく、せなかをまつすぐにして環からはなれて、まんなかの方に進み出ました。

みんなは停とまつてそれを見ています。

進んで行った鹿しかは、首をあらんかぎり延ばし、四本しほんの脚あしを引きしめ引きしめそろりそろりと手てぬぐい拭ぬぐいに近づいて行きましたが、俄にわかにひどく飛びあがって、一目散に遁にげ戻もどつてきました。廻りの五疋も一ぺんにぱつと四方へちらけようとなりましたが、はじめの鹿が、ぴたりととまりましたのでやつと安心して、のそのそ戻つてその鹿の前に集まりました。

「なじよだた。なにだた、あの白い長いやづあ。」

「縦しわに皺しわの寄よつたもんだけあな。」

「そだら生きものだないがべ、やっぱり葶きのこなどだべが。毒ぶすき葶きのこ

だべ。」

「うんにや。きのごだない。やっぱり生きものらし。」

「そうが。生きもので皺うんと寄つてらば、年としよ老りだな。」

「うん年老りの番兵だ。ううはははは。」

「ふふふ青白の番兵だ。」

「ううははは、青じろ番兵だ。」

「こんどおれ行つて見べが。」

「行つてみる、大だい丈夫じょうぶだ。」

「喰くつつかないが。」

「うんにや、大丈夫だ。」

そこでまた一疋が、そろりそろりと進んで行きました。五疋はこちらで、ことりこりとあたまを振ふつてそれを見ていました。

進んで行った一疋は、たびたびもうこわくて、たまらないというように、四本の脚を集めてせなかを円まろくしたりそつとまたのばしたりして、そろりそろりと進みました。

そしてとうとう手拭のひと足こつちまで行って、あらんかぎり首を延ばしてふんふん嗅かいでいましたが、俄かにはねあがつて遁げてきました。みんなもびくつとして一ぺんに遁げだそうとしましたが、その一ぴきがびたりと停まりましたのでやつと安心して五つの頭をその一つの頭に集めました。

「なじよだた、なして逃げで来た。」

「嚙^かじるべとしたようだたもさ。」

「ぜんたいなにだけあ。」

「わがらないな。とにかく白どそれがら青ど、両方のぶぢだ。」

「匂^{におい}あなじよだ、匂あ。」

「柳の葉みだいな匂だな。」

「はでな、息吐^{いきつ}でるが、息^{いき}。」

「さあ、そでば、気付けないがた。」

「こんどあ、おれあ行つて見べが。」

「行つてみる」

三番目の鹿^{しか}がまたそろりそろりと進みました。そのときちよつと風が吹いて手拭がちらつと動きましたので、その進んで行つた

鹿はびっくりして立ちどまってしまい、こっちのみんなもびくつとしました。けれども鹿はやつとまた気を落ちつけたらしく、またそろりそろりと進んで、とうとう手拭まで鼻さきを延ばした。こっちでは五疋がみんなことりことりとお互たがいにうなずき合つて居おりました。そのとき俄かに進んで行った鹿が竿立さおだちになつて躍おどりあがつて遁にげてきました。

「何なして遁にげできた。」

「氣味悪きびわりくなてよ。」

「息吐いきつでるが。」

「さあ、息いきの音おとあ為さないがけあな。口くちも無いようだけあな。」

「あだまあるが。」

「あだまもゆぐわがらないがったな。」

「そだらこんだおれ行つて見べが。」

四番目の鹿が出て行きました。これもやつぱりびくびくものです。それでもすつかり手拭の前まで行つて、いかにも思い切つたらしく、ちよつと鼻を手拭に押おしつけて、それから急いで引つ込めて、一目さんに帰つてきました。

「おう、柔やつけもんだぞ。」

「泥どろのようになが。」

「うんにや。」

「草のようになが。」

「うんにや。」

「ごまざいの毛のようにな。」

「うん、あれよりあ、もう少し硬こわばしな。」

「なにだべ。」

「とにかぐ生なまぎもんだ。」

「やっぱりそうだが。」

「うん、汗あせ臭くさいも。」

「おれも一ひと遍がえり行いつてみべが。」

五番目の鹿がまたそろりそろりと進んで行きました。この鹿はよほどおどけもののようでした。手拭の上にすっかり頭をさげて、それからいかにも不審ふしんだというように、頭をかくつと動かしませんでした。こっちの五疋がはねあがって笑いました。

向うの一疋はそこで得意になって、舌を出して手拭を一つべろりと嘗なめました。にわかこわに怖こわくなったとみえて、大きく口をあけて舌をぶらさげて、まるで風のように飛んで帰ってきました。みんなもひどく愕おどろきました。

「じゃ、じゃ、噛かじらえだが、痛いたぐしたが。」

「プルルルルル。」

「舌ぬ抜がれだが。」

「プルルルルル。」

「なにした、なにした。なにした。じゃ。」

「ふう、ああ、舌ちぢ縮ちぢまってしまったたよ。」

「なじよな味だた。」

「味無いがたな。」

「生ぎもんだべが。」

「なじよだが判^{わか}らない。こんどあ汝^{うな}あ行つてみる。」

「お。」

おしまいの一疋がまたそろそろ出て行きました。みんながおもしろそうに、ことごと頭を振つて見ていますと、進んで行つた一疋は、しばらく首をさげて手拭を嗅^かいでいましたが、もう心配もなにもないという風で、いきなりそれをくわえて戻^{もど}つてきました。そこで鹿はみなびよんぴよん跳^とびあがりました。

「おう、うまい、うまい、そいづさい取つてしめば、あどは何^{なん}つても怖^おつかなくない。」

「きつともて、こいづあ大きな 蝸なめくずら 牛ひの早ひからびだのだな。」
 「さあ、いいが、おれ歌うたうだうはんてみんな廻まれ。」
 その鹿はみんなのなかにはいつてうたいだし、みんなはぐるぐるぐるぐる手拭をまわりはじめました。

「のはらのまん中の めつけもの

すつこんすつこの 栃とちだんご

栃のだんごは 結けっごう構こうだが

となりにいからだ ふんながす

青じろ番兵ばんぺは 気にかがる。

青じろ番兵ばんぺは ふんにやふにや

吠ほえるもささないば 泣ほぐもささない

瘠せで長くて　　ぶちぶちで

どごが口だが　　あだまだが

ひでりあがりの　　なめぐじら。」

走りながら廻りながら踊りながら、鹿はたびたび風のように進んで、手拭を角でついたり足でふんだりしました。嘉十の手拭はかあいそうに泥がついてところどころ穴さえあきました。

そこで鹿のめぐりはだんだんゆるやかにになりました。

「おう、こんだ団子お食ばがりだじよ。」

「おう、煮だ団子だじよ。」

「おう、まん円けじよ。」

「おう、はんぐはぐ。」

「おう、すっこんすっこ。」

「おう、けっこ。」

鹿はそれからみんなばらばらになって、四方から栃のだんごを
囲んで集まりました。

そしていちばんはじめに手拭に進んだ鹿から、一口ずつ団子を
たべました。六^{びき}足の鹿は、やっと豆^{まめ}粒^{つぶ}のくらいをたべただけ
です。

鹿はそれからまた環^わになって、ぐるぐるぐるぐるめぐりあるき
ました。

嘉十はもうあんまりよく鹿を見ましたので、じぶんまでが鹿の
ような気がして、いまにもとび出そうとしましたが、じぶんの

きな手がすぐ眼にはいりましたので、やっぱりだめだとおもいながらまた息をこらしました。

太陽はこのとき、ちょうどはんのきの梢の中ほどにかかつて、少し黄いろにかがやいて居りました。鹿のめぐりはまただんだんゆるやかになって、たがいにせわしくうなずき合い、やがて一列に太陽に向いて、それを拝むようにしてまつすぐに立ったのです。嘉十はもうほんとうに夢のようにそれに見とれていたのです。

一ばん右はじにたつた鹿が細い声でうたいました。

「はんの木ぎの

みどりみじんの葉もじの向さ

じやらんじやらんの

お日さん懸かがる。」

その水すい晶しょうの笛ふえのような声に、嘉十は目をつぶってふるえあがりしました。右から二ばん目の鹿が、俄にわかにとびあがって、それからからだを波のようにうねらせながら、みんなの間を縫ぬってはせまわり、たびたび太陽の方にあたまをさげました。それからじぶんのところに戻るやびたりととまってうたいました。

「お日さんを

せながさしよえば　はんの木ぎも

くだけで光る

鉄のかんがみ。」

はあと嘉十もこつちでその立派な太陽とはんのきを拝みました。

右から三ばん目の鹿は首をせわしくあげたり下げたりしてうたいました。

「お日さんは

はんの木ぎの向もき、降りでも

すすぎ、ぎんがぎが

まぶしまんぶし。」

ほんとうにすすぎはみんな、まっ白な火のように燃えたのです。

「ぎんがぎがの

すすぎの中ながさ立たちあがる

はんの木ぎのすねの

長ながんがい、かげぼうし。」

五番目の鹿がひくく首を垂れて、もうつぶやくようにうたいだしていました。

「ぎんがぎがの

すすぎの底そこの日暮ひぐれかだ

苔こげの野はらを

蟻ありこも行がず。」

このとき鹿はみな首を垂れていましたが、六番目がにわかには首をりんとあげてうたいました。

「ぎんがぎがの

すすぎの底そこでそっこりと

咲ぐうめばちの

愛えどしおえどし。」

鹿はそれからみんな、みじかく笛のように鳴いてはねあがり、はげしくはげしくまわりました。

北から冷たい風が来て、ひゅうと鳴り、はんの木はほんとうに砕くだけた鉄の鏡のようにかがやき、かちんかちんと葉と葉がすれあつて音をたてたようにさえおもわれ、すすきの穂ほまでが鹿にまじつて一しよにぐるぐるめぐつているように見えました。

嘉十はもうまったくじぶんと鹿とのちがいを忘れて、

「ホウ、やれ、やれい。」と叫さけびながらすすきのかげから飛び出しました。

鹿はおどろいて一度に竿さおのように立ちあがり、それからはやて

に吹ふかれた木の葉のように、からだを斜ななめにして逃げ出にしました。銀のすすきの波をわけ、かがやく夕陽ゆうひの流れをみだしてはるかに
はるかに遁にげて行き、そのとおったあとのすすきは静かな湖の水み
脈おのようにいつまでもぎらぎら光つて居りました。

そこで嘉十はちよつとにが笑いをしながら、泥のついて穴のあ
いた手てぬぐい拭ぬぐをひろつてじぶんもまた西の方へ歩きはじめたのです。
それから、そうそう、苔こけの野原の夕陽の中で、わたくしはこの
はなしをすきとおった秋の風から聞いたのです。

青空文庫情報

底本：「注文の多い料理店」新潮文庫、新潮社

1990（平成2）年5月25日発行

1997（平成9）年5月10日17刷

初出：「イーハトヴ童話 注文の多い料理店」盛岡市杜陵出版部

・東京光原社

1924（大正13）年12月1日

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2005年2月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鹿踊りのはじまり

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>